

縄文時代後晩期の石鏃について

—部分磨製石鏃を中心に—

川添和暁

縄文時代の石鏃は、剥離調整による打製石鏃が主体である。しかし、剥離調整を基調としながらも、一部に研磨調整が施されている石鏃（部分磨製石鏃）が存在することは、これまで先学により指摘されている。縄文時代早期の事例が早くから注目される一方で、後に後・晩期の事例についても知られるようになった。ここでは縄文時代中期末以降の北関東から関西地域の資料群を中心に検討を加えた。法量・研磨の志向・使用石材などの諸検討の結果、「部分磨製石鏃」は一様ではなく、7つの類型に分類され、各類型でその歴史的位置づけが必要であるとの認識に至った。

はじめに

石鏃は小型剥片石器の代表的な器種である。石鏃の製作技術・石材利用の検討などは一器種のみの問題にとどまらず、小型剥片石器全体に及ぶ。これまでも多角的な研究が先学によって最もなされているといえよう。

縄文時代の石鏃はほぼ打製石鏃であることはよく知られている。しかしその中で、時期的・地域的に磨製技術が施されている一群が存在していることも知られている。まず縄文時代早期の資料群が注目され、ここ20年来、縄文時代後期・晩期にも同様の資料が存在することがいわれるようになった。この小論では、このような資料群に対する検討を行うことによって、当時の石鏃群の構造的な理解を試みるものである。

これら一部に磨製技術が使われている石鏃に対して「局部磨製石鏃」「半磨製石鏃」「部分磨製石鏃」などの名称が付けられている。用語が指し示す内容として、両者に実質的な差異はほぼ認められない。ここでは、東海地域の資料を中心に扱うことと、後晩期の資料を扱うことから、後述する齊藤氏の研究成果に従って、「部分磨製石鏃」の名称を使用する。

この小論では中期末以降の資料について扱う。詳細な検討に関しては北関東地域から関西地域の資料を中心に扱い、今回は九州地域の資料は扱わない。

研究小史

「部分（局部）磨製石鏃」の認知から、早期押型文期の所産としての注目、編年案の提示、さらには後晩期の資料の提示など、早期の資料に関わる研究を中心として信藤祐仁氏が深くまとめられている（信藤1989）。ここではそれを参考とし、特に後晩期の資料に関係するものに焦点を当てていく。

後晩期にも「部分（局部）磨製石鏃」が存在することにはじめて触れたのは、吉田格氏のようなものである（吉田1951）。同じ時期に芹沢長介氏が早期の特徴的な石器として注目していることは対照的である（芹沢1949）。その後長野県樋沢遺跡・岐阜県椈の湖遺跡の調査を経て、草創期から早期にかけての特徴的な石器として認知されるようになる。

「部分（局部）磨製石鏃」に関して、はじめて列島的な集成を行ったのは、下川達彌氏である（下川1973）。その中で、草創期・早期ではない時期の資料がいくつか提示された。

このように、「部分（局部）磨製石鏃」は後期・晩期にも見られることを一部では認識されつつも、当初は早期に特徴的な石器として取り上げられ、一部は早期押型文土器編年の補強として用いられていたようである。後期・晩期の資料について焦点を当てた研究が出てくるのは若干後になってからである。多くの注目すべき研究

成果がみられるが、ここでは研究の概略のみ述べ、その成果に関しては随時後述していく。

齊藤基生氏は東濃地域の資料を用い、晩期の部分磨製石鏃がまとまって存在することを指摘し、部分磨製石鏃をこれまで安易に草創期・早期に比定していたことに警鐘を鳴らした(齊藤 1986)。法量・石材・研磨部分・分布の検討など、愛知県も含めた当地域の部分磨製石鏃について基礎的な検討が行われたといえよう。前年に報告がなされた阿曾田遺跡の資料がもとになっているようである(渡辺編 1985)。

また、大工原豊氏は齊藤氏の成果を援用しながら関東・中部地域の後期・晩期の資料に検討を加えている(大工原 1990)。大工原氏はこれらの資料がいわば「完成品」であることに注目する。製作・使用した集団の「範型」を反映しているとし、これを基にした「模倣型」の許容範囲を明らかにすることによって、その集団の「範型」を抽出しようとする。北関東を中心に見られる一群に対し、凹基無茎鏃であることと黒曜石製であることを十分条件とする「関東型局部磨製石鏃」を設定し、一方齊藤氏が取り上げた東濃(東海)地域の資料に対しては、安山岩類を主体で、より形態規制の緩やかなものとして「中部型局部磨製石鏃」と呼称した。「関東型局部磨製石鏃」に関しては漁撈との関連が示唆されており、「中部型局部磨製石鏃」の成立には、出現時期の差から「関東型局部磨製石鏃」からの影響を想定されている。

信藤祐仁氏は部分磨製石鏃の集成を行う中で、通史的な検討を行っている(信藤 1989)。資料として草創期・早期・後期・晩期と断続して存在することを示されている。部分磨製の意味に関しては「着柄の微調整のための産物と考えられる」とする一方で、「着柄効果を追及した以外に、何か特別な意識が働いたのであろう」とも述べられている。

齊藤基生氏は、長崎県泉福寺洞穴遺跡出土石鏃を分析するにあたり、九州地域の部分磨製石鏃について広く観察を行い、「九州地方」の資料と「中部地方」の資料との比較検討を行っている(齊藤 2002)。部分磨製の研磨のあり方を、「研磨 a」(研磨面が平らもしくは凸状をなすもの)と「研磨 b」(研磨面が凹面をなすもの)と

大別され、さらに「研磨 a」を「研磨 a'」(稜を生じているもの)と「研磨 a''」(凸面をなすもの)に細別されている。共通点としては両者とも無茎鏃(I類)が基本であることとし、相違点として時期的変遷・研磨方法・研磨部位についてまとめられている。

川添和暁は、日本列島内の「根挟み」について検討する中で、東海地域の部分磨製石鏃についても若干取り上げている(川添 2004)。大工原氏のいうところの「中部型局部磨製石鏃」の消長は、東海地域における「根挟み」のそれにほぼ近いとした上で、「東海地域においては、部分磨製石鏃と根挟みがある程度有機的な関係を持っていた」と仮説を立てた。

今回の小論は、上記の川添小論を受けて、それを部分磨製石鏃側から検討するものである。関西縄文文化研究会による集成作業の結果、部分磨製をおこなっている石鏃は東海地域を中心に縄文後期前葉から見られることが明らかとなった(関西縄文文化研究会 2004)。しかし、すべて一様なものではなく「部分磨製石鏃」として一括された資料に対して、詳細な検討が必要である。さらにこの石鏃の検討を行うには、齊藤氏・大工原氏が行ったように、同時にそれ以外の石鏃との対比も必要である。また、特に東海地域における資料に関しては認知度が低く、再度集成作業が必要であると考えられた。

部分磨製石鏃の認定

ここで扱う「部分磨製」は製作痕であることを想定している。しかし、実資料に即したとき、製作痕としての「研磨」と、使用痕としての「摩滅」の識別が困難なものも含まれているのは事実である。今回、部分磨製の認定にあたり、以下の点に留意した。

1. 製作による線条痕が観察できること。
2. 使用および埋没による摩滅などと区別するために、平面部全体ではなく、明らかに磨製部分とそれ以外の部分との峻別ができること。
3. 両面に見られる場合、線条痕が不明瞭でも、同遺跡出土の残核などとの対比から、原石の段階で石鏃の厚さの原石が持ち込まれたとは考えられにくい場合。

部分磨製石鏃の中には、研磨の部分が一見礫風化面との区別が難しい場合もあり、報告では「風化面」と認識されているものもしばしばみられる。特に東海地域の資料に関しては、それが顕著である（註1）。

資料の時間的・空間的分布

現在までのところ、縄文中期末以降の部分磨製石鏃は、53遺跡200点弱の資料数が知られている。縄文時代後期・晩期、そして一部弥生時代にも存在する可能性がある。分布は、北関東地域から東海・近畿そして九州地域にかけて見られる（図1・表1）。関西地域や九州地域の例は縄文時代後期にほぼおさまるようで、晩期になると、北関東地域・中部高地・東海地域に分布が狭くなる。晩期には主に、東海地域を中心に資料数が増加する。太平洋側および中央の山地帯で多く見つかったものの、日本海側では管見の及ぶ限り見られない。今後、資料が見つかることが想定される。また出土点数状況についても、一遺跡から多数知られている例と、一遺跡から1・2例しか知られていない例とがある。

部分磨製石鏃は、磨製調整が施されているという共通性はあるものの、使用石材・製作技法などにより、いくつか異なる様相がみられる。以下、部分磨製石鏃自体の分析と、石鏃群全体に対する部分磨製石鏃の位置づけを中心に、分析を試みていく。

部分磨製石鏃の分析

1 法量（図5）長さ1～3cm・幅1～2cmの範囲にまとまりが見られる。下呂石製に関しては長さ1～4.5cm・幅1～2.5cmほどと平面的に大型の石鏃が目立つ。厚さについては、ほぼ0.4cm以下に集中している。下呂石製では0.5cm～0.7cmの例も見られるが稀である。平面的に大型のものでも0.3cm～0.4cmの厚さを保っており、この厚さが主体であると考えられる。一方、黒曜石・下呂石以外の資料で、

厚さ0.1～0.2cmにまとまる一群が存在する。中川原遺跡例（図4の111～113）と溝ノ口遺跡例（同図131）であり、中川原遺跡例は、後述する製作技法の点からも若干異質である。

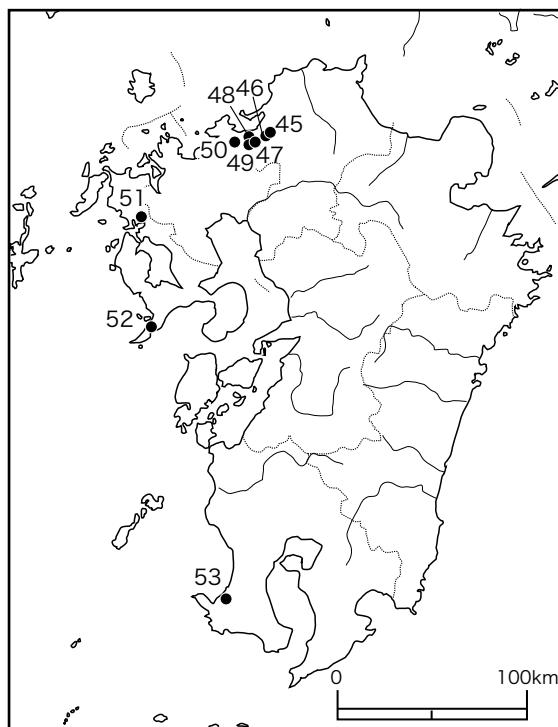
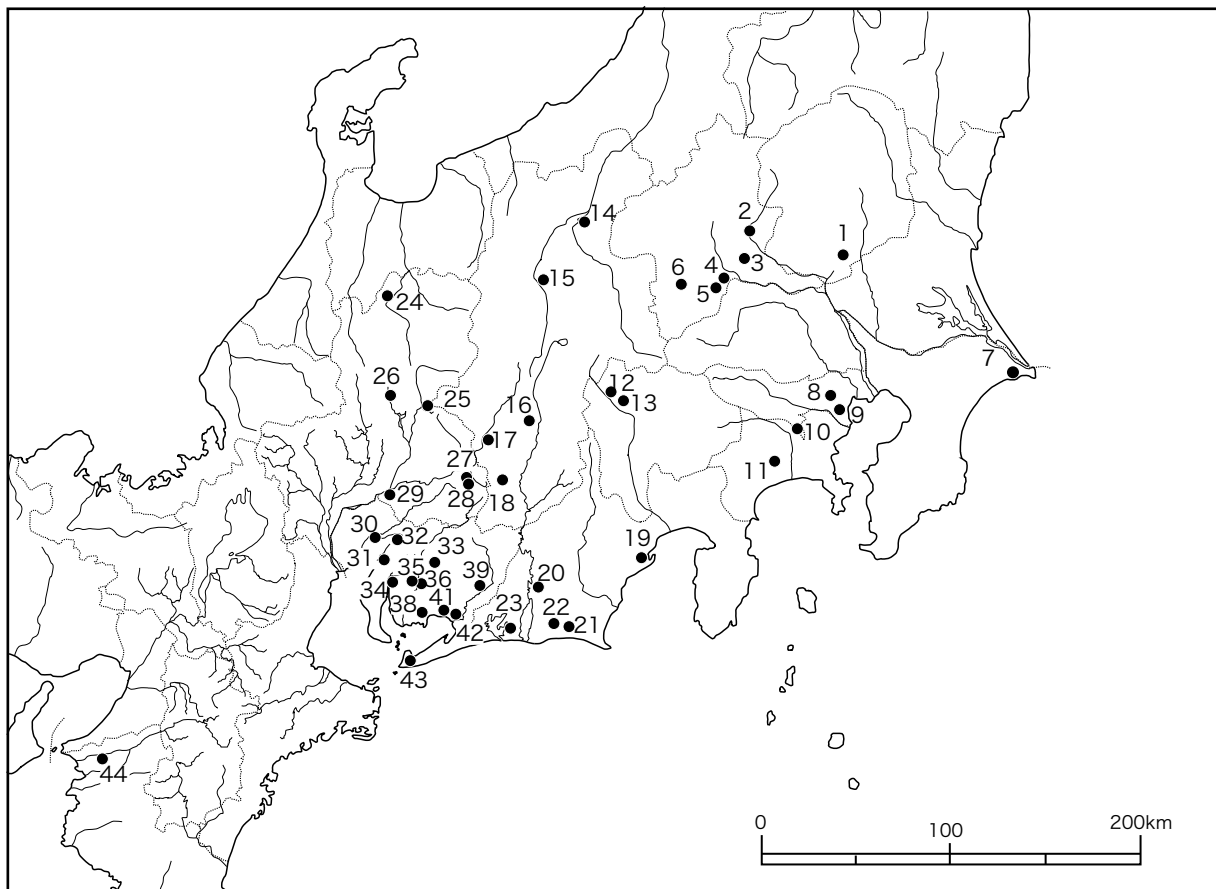
2 形態 基部形態では、有茎鏃と無茎鏃との両者が見られる。有茎鏃は注連引原遺跡で見られるなどごくわずかであり、圧倒的に無茎鏃が多い。本来、部分磨製調整は無茎鏃に対して主体的に施されていたことが窺えられる。また、平面形態では、ある特定の形態に集約されている傾向を窺うことはできない。側辺が鋸歯縁状になっているものがいくつか見られる（図2の6、図3の86・94）ものの、少数である。

3 使用石材 使用されている石材には「黒曜石」・「下呂石」・「チャート」・「サヌカイト」・「珪質頁岩」・「頁岩」・「凝灰岩」・「粘板岩」・「ホルンフェルス」などが報告されている。時期と地域により使用石材に違いが見られる。北関東地域から中部高地にかけては、縄文中期末から晩期にわたりほぼ黒曜石が主体であり、一部「凝灰岩」とされる石材も使用される。一方、東海地域では縄文時代晩期を中心に下呂石が石材の主体を占める。その他縄文後期の例を中心にチャート・頁岩・凝灰岩・ホルンフェルスなど多様な石材が使用されているようであり、地域的なまとまりはみられない。

4 製作工程と研磨の状態 打製石鏃の基本的な調整である剥離調整と研磨調整との関係について分類する。剥離調整を基調とし最後にのみ研磨調整を行うものを工程Ⅰ類、剥離調整の前に研磨調整を施しているものを工程Ⅱ類とする。工程Ⅱ類には、研磨調整ののち剥離調整で終了しているものと、研磨調整・剥離調整ののちさらに研磨調整が施されているものがある。

部分磨製石鏃は、剥離調整を基本としており、工程Ⅰ類が主体である。工程Ⅱ類もしくはその可能性が高い例として、中川原遺跡（図4の111～113）と川地貝塚（同図130）の例がある。研磨部分が平面全体にわたる場合が多いのも特徴であり、特に中川原の例は素材剥片の段階で研磨による調整を行い、剥離調整（おそらく押圧剥離）を縁辺のみ行っている（註2）。

（註1）例えば、『牛牧遺跡』（川添編2001）の図版76-1115などである。このことは後述する類型Ⅶの使用石材の特徴によるものである。



- | | | | |
|-----------|---------|---------|--------------|
| 1 乙女不動原北浦 | 22 西 | 32 大六 | 35 御用池 |
| 2 千網谷戸 | 23 蛭塚 | 33 中川原 | 36 真宮 |
| 3 八坂 | 24 宮ノ前 | 34 中手山 | |
| 4 谷地 | 25 下島 | | |
| 5 山間 | 26 岩切森本 | | |
| 6 注連引原 | 27 中村 | | |
| 7 八祖 | 28 阿曾田 | | |
| 8 向方南 | 29 北裏 | | |
| 9 下沼部 | 30 牛牧 | | |
| 10 なすな原 | 31 雷 | | |
| 11 下北原 | | | |
| 12 豆生田第3 | | | |
| 13 清水端 | | | |
| 14 宮崎 | | | |
| 15 石行 | | | |
| 16 田中下 | | | |
| 17 大明神 | | | |
| 18 川端 | | | |
| 19 清水天王山 | | | |
| 20 中森 | | | |
| 21 大畑 | | | |
| | 37 五本松 | 41 稻荷山 | 48 有田 |
| | 38 東光寺 | 42 五貫森 | 49 四箇 |
| | 39 大ノ木 | 43 川地 | 50 野方
勸進原 |
| | 40 黒瀬 | 44 溝ノ口 | 51 泉福寺 |
| | | 45 板付 | 52 深堀 |
| | | 46 比恵 | 53 高橋 |
| | | 47 干隈熊添 | |

図1 縄文時代後晩期 部分磨製石鏃出土遺跡
(齊藤 1986・2002, 信藤 1989, 下川 1973 に追加)

表1 遺跡一覧表(番号は図1と一致)

番号	遺跡名	所在地	時期	点数	使用石材	文献
1	乙女不動原北浦遺跡	栃木県小山市	後期前半～晩期前半	1	黒曜石	三沢・福田1982
2	千網谷戸遺跡	群馬県桐生市	晩期前半	12	黒曜石	伊藤・増田・高橋1978
3	八坂遺跡	群馬県伊勢崎市	後期・晩期	2	黒曜石	大工原1990
4	谷地遺跡	群馬県藤岡市	後期前半～晩期前半	4	黒曜石・凝灰岩	前原・古郡・大工原ほか1982
5	山間遺跡	群馬県藤岡市	中期末～後期前半	9	黒曜石	前原・古郡・大工原ほか1982
6	注連引原遺跡	群馬県安中市	晩期終末～弥生前期末	1	黒曜石	大工原ほか1987
7	八祖遺跡	千葉県銚子市	後期中葉～後葉	1	チャート	岡崎・新津1978
8	向方南遺跡	東京都杉並区	後期中葉	1	黒曜石	志村1984
9	下沼部遺跡	東京都太田区	後期・晩期	○	不明	下川1972
10	なすな原遺跡	東京都町田市	後期前葉～晩期末	1	黒曜石	成田・小淵・重久1984
11	下北原遺跡	神奈川県伊勢原市	後期前半	7	黒曜石・凝灰岩	鈴木・大上1977
12	豆生田第3遺跡	山梨県北杜市	後期	○	黒曜石	榎原1986
13	清水端遺跡	山梨県北杜市	後期	3	黒曜石	宮沢1986
14	宮崎遺跡	長野県長野市	中期末～晩期	5	黒曜石	矢口・青木・鶴田ほか1988
15	石行遺跡	長野県松本市	晩期終末	1	黒曜石	太田・関根ほか1987
16	田中下遺跡	長野県宮田村	後期終末～晩期前葉	6	黒曜石5・チャート1	友野編1994
17	大明神遺跡	長野県大桑村	後期初頭～晩期中葉	1	安山岩1	新谷編1988
18	川畑遺跡	長野県下伊那郡阿智村	晩期?	1	安山岩?	長野県教育委員会1971
19	清水天王山遺跡	静岡県静岡市	晩期初頭～弥生前期	2	黒曜石・安山岩類	長谷川1992
20	中森遺跡	静岡県周智郡春野町	晩期前半	1	珪質頁岩	春野町教委1979
21	大畑遺跡	静岡県袋井市	晩期前半	1	チャート	袋井市教委1981
22	西貝塚	静岡県磐田市	後期前葉～後葉	1	不明	麻生ほか1961
23	蛸塚貝塚	静岡県浜松市	後期前葉～後葉	1	泥岩起源のホルンフェルス	表探資料(浜松市博所蔵)
24	宮ノ前遺跡	岐阜県古城郡宮川村	後期中葉～晩期	2	輝石安山岩・下呂石	小島2000
25	下島遺跡	岐阜県下呂市	後期後葉～弥生	3	下呂石	高井1985
26	岩切森本遺跡	岐阜県郡上市	中期後葉～晩期	4	下呂石	金子1993
27	中村遺跡	岐阜県中津川市	後期～晩期	30	下呂石・黒曜石	住田ほか1979・斎藤1986
28	阿曾田遺跡(下阿曾田地区)	岐阜県中津川市	晩期	13	下呂石	渡辺編1985
29	北裏遺跡	岐阜県可児市	晩期	22	安山岩類(下呂石か)	大江・紅村1973
30	牛牧遺跡	名古屋市守山区	後期後葉～晩期末	8	下呂石	川添2003・川合2004
31	雷貝塚	名古屋市緑区	晩期	6	下呂石	川合2004
32	大六遺跡	愛知県瀬戸市	晩期前葉～中葉	2	下呂石	佐野2001
33	中川原遺跡	愛知県豊田市	後期～晩期	2	下呂石	松井・高橋1999
34	中手山貝塚	愛知県刈谷市	晩期	1	下呂石	大参ほか1989
35	御用池遺跡	愛知県安城市	晩期後半	1	下呂石	岡安編1996
36	真宮遺跡	愛知県岡崎市	晩期中葉	18	下呂石・サヌカイト?	斎藤2001
37	五本松遺跡	愛知県岡崎市	～弥生中期	1	安山岩	藤島・紅村1959
38	東光寺遺跡	愛知県幸田町	晩期中葉	3	下呂石2・チャート1	加藤編1993
39	大ノ木遺跡	愛知県新城市	後期末～弥生中期	○	不明	紅村1963
40	黒瀬遺跡	愛知県新城市	後期前葉～中葉	2	「粘板岩製らしい」	紅村1963
41	稲荷山貝塚	愛知県小坂井町	晩期中葉	7	下呂石	清野1969・中村編1992
42	五貫森貝塚	愛知県豊橋市	弥生前期以降	1	不明	杉原・外山1964
43	川地貝塚	愛知県渥美町	後期前葉～中葉	1	頁岩	原田編1995
44	溝ノ口遺跡	和歌山県海南市	後期前葉～中葉	2	サヌカイトなど	中尾・前田1984、1987
45	板付遺跡	福岡市博多区	弥生前期～後期	2	黒曜石	山口編1981
46	比恵遺跡	福岡市博多区	弥生後期	1	黒曜石	福岡市教育委員会1983
47	干隈熊添古墳	福岡市早良区	後期～晩期	1	黒曜石	熊添古墳調査会1985
48	有田遺跡	福岡市早良区	後期～晩期	2	黒曜石	福岡市教育委員会1981b
49	四箇遺跡群	福岡市早良区	後期	1	黒曜石	二宮編1983
50	野方勸進原遺跡	福岡市西区	晩期?	2	黒曜石	福岡市教育委員会1981a
51	泉福寺洞穴	長崎県佐世保市	中期～晩期	13	黒曜石	斎藤2002
52	深堀遺跡	長崎県長崎市	後期	○	不明	内藤ほか1967
53	高橋貝塚	鹿児島県金峰町	弥生前期	2	黒曜石・安山岩類	河口1965

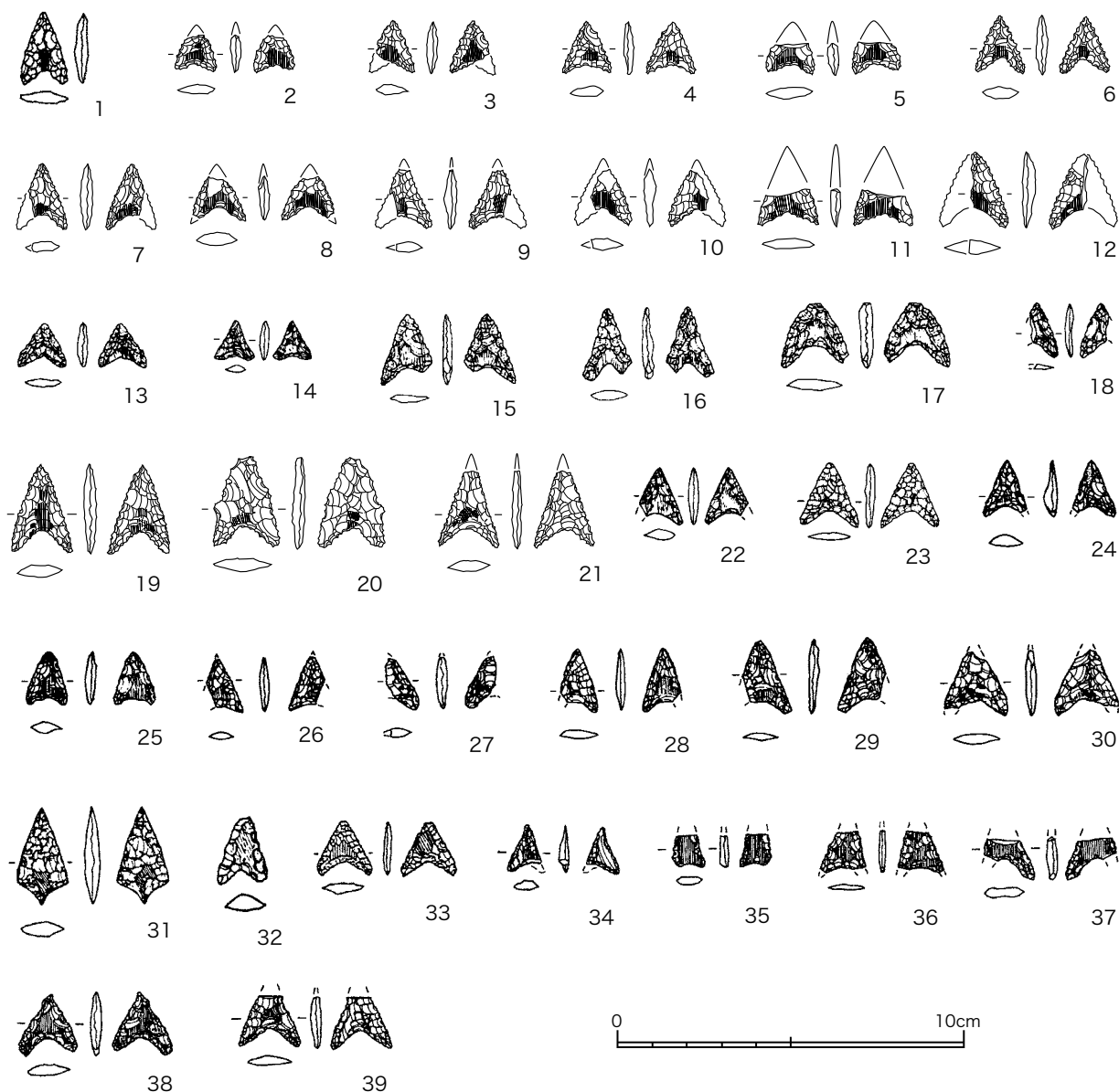
工程Ⅰ類の研磨についてさらに詳細に検討する。まず研磨調整が施された面数についてである。大きくは一面(片面)のみと二面(両面)とに分かれる。石材に関わらず、片面のみのものと両面のものとの両者が存在する。しかし、千網谷戸遺跡・谷地遺跡・山間遺跡など北関東域の黒曜石製資料については、片面研磨のものも若干存在するものの両面研磨が圧倒的に多

い。次に、研磨調整が施された部分について検討する。大きくは(1)基部、(2)「最大厚」部分(註3)、(3)先端部側にかけて、(4)脚部、に分けられる(図6)。(4)脚部への研磨は(1)・(2)から連続している場合がほとんどであり、本来(1)・(2)に研磨を施す意図で副次的になされたものと考えられる。また、(3)先端部側にかけてはほぼ(2)と連続しており、(3)のみを意

(註2) 報告では、この製作技法上の特徴から、齊藤氏のとりあげた部分磨製石鏃とは異なるとし、早期押型文土器に伴う資料との共通性を示唆されている。

識的に研磨調整したと考えられる事例は見られない。実資料に即すると、(1)・(2)・(3)の組み合わせによって、研磨AからEまでの5パターンが見られる。研磨Eに顕著であるが、両面に研磨が施されている場合、両者同パターンの研磨が行われていない場合もある。研磨Aは北関東地域の黒曜石製資料に顕著であり、若干東海地域の下呂石製資料にも見られる。一方、研磨

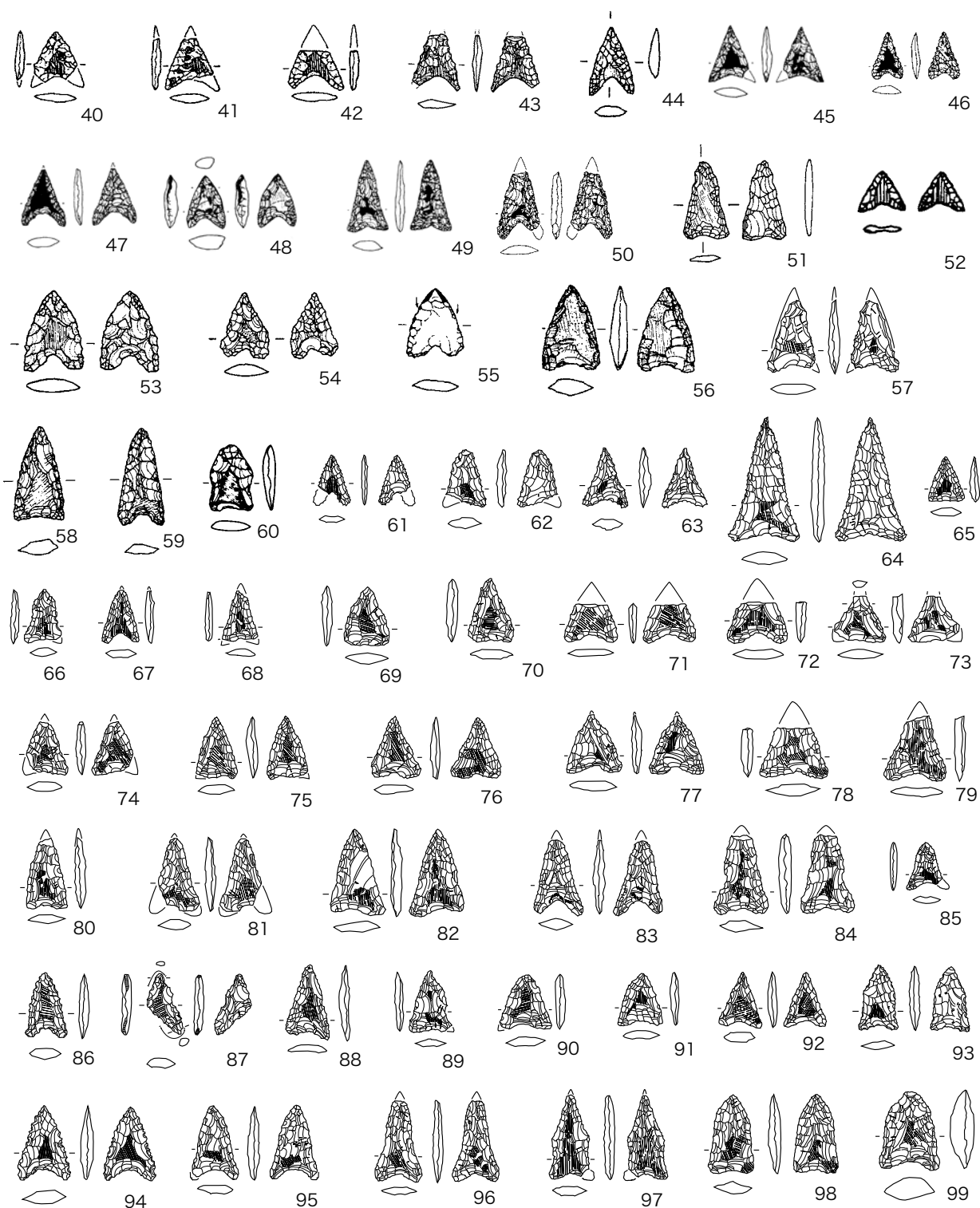
Cは東海地域の下呂石製資料に多く見られ、北関東地域では非黒曜石製資料に若干存在する程度である。研磨Dは東海地域の下呂石製資料のみならず、大畑遺跡例(図3の56)や田中下遺跡例(同図47)などにも散見される。これらの研磨パターンは目的的行われた研磨行為として、研磨Aと研磨Cに収斂され、時にはこの両者を同時に行おうとした研磨行為(研磨B)も



1 乙女不動原北浦、2~12 千網谷戸、13~23 谷地、24~30 山間、31 注連引原、32 八祖、33 向方南、34~39 下北原
1~20・23~35・37~39 黒曜石、21 頁岩、22・36 凝灰岩、32 チャート

図2 部分磨製石器実測図 1 (1:2)

(註3) 石鏃の最も厚みのある部分を、ここでは仮に「最大厚」部分と呼称する。



0 10cm

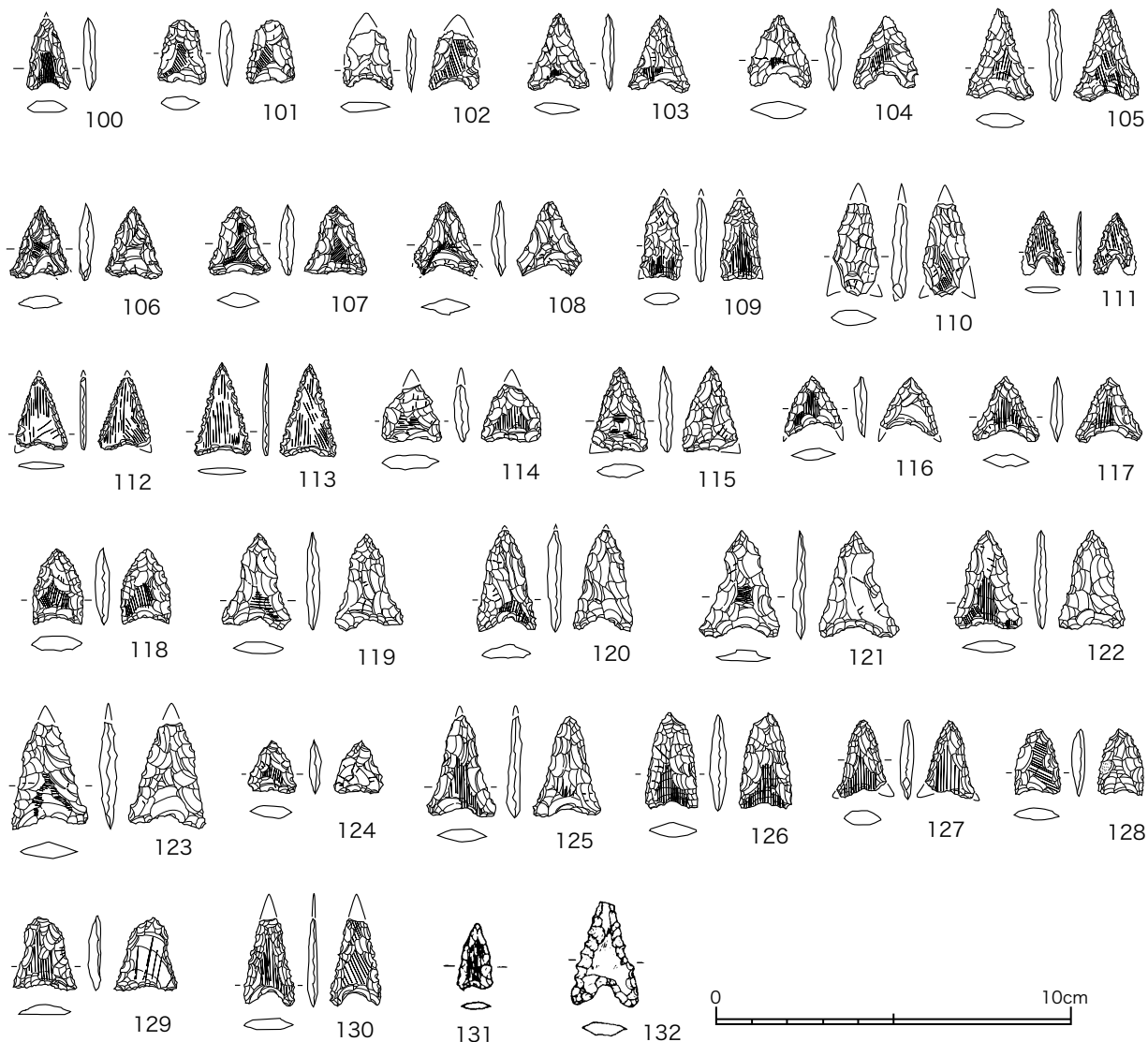
40～42 清水端、43 宮崎、44 石行、45～50 田中下、51 大明神、52 川端、53・54 清水天王山、55 中森、56 大畑、57 蜷塚、58・59 宮ノ前、60 下島、61～64 岩切森本、65～85 中村、86～91 阿曾田、92～99 北裏
40～44・46～50・54・85 黒曜石、45・56 チャート、55 珪質頁岩、53・93 安山岩、58～84・86～92・94～99 下呂石、57 泥岩起源のホルンフェルス？

図3 部分磨製石鏃実測図 2 (1:2)

あったと想定される。研磨Aは基部を平滑にする目的、研磨Cは石鏃の最大厚を薄くする目的、研磨Bはその両者を行なう目的があったものと考えられる(註4)。

5 転用 部分磨製石鏃の中には、側辺に細長い

平坦面が残る程度にまで擦痕が残されているものがある(図3の48・55・87)。48・55は石鏃の先端部を中心とし、87は先端部と脚部の両側に擦痕が見られる。87は脚部欠失品である。これらの擦痕はその状態から、製作痕では



100～105 牛牧、106～108 雷、109・110 大六、111～115 中川原、116～123 真宮、124～126 東光寺、127～129 平井稻荷山、130 川地、131・132 溝ノ口

100～110・114～125・127～129 下呂石、111～113 凝灰岩質、126 チャート、130 頁岩、132 サヌカイト、131 石材不詳

1・13～18・22～39・40～56・58～60・131・132 は各報告書より引用

65～92・97～99 は齊藤 1986 に加筆修正

図4 部分磨製石器実測図 3 (1:2)

(註4) 研磨AとCとは、研磨の作業動作に若干の差が生じてくる。仮に床に砥石を置き、研磨する石鏃を手にとって動作を行なうと想定した場合、研磨Aでは石鏃の凹部分を研磨するので、砥石の端など凸部分を利用することとなり、一方研磨Cでは石鏃の凸部分を研磨するので、砥石の平坦部を主に利用することとなる。このことから研磨作業として、研磨AとCとは意識的な差として認識することができる。

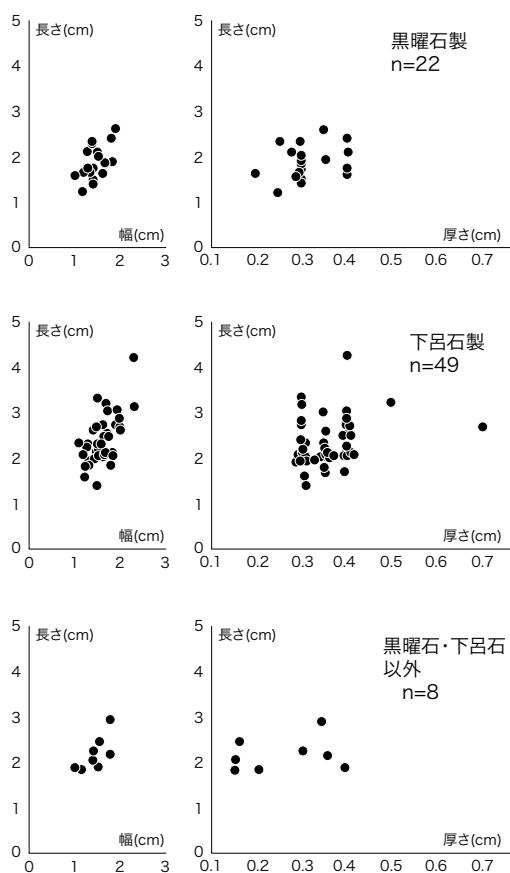


図5 部分磨製石鏃 法量散布図

なく使用による摩滅と考えられ、石鏃への転用がなされた結果であると考えられる。部分磨製石鏃に関わらず、石鏃一般に見られる転用例である。

非部分磨製石鏃との対比分析

部分磨製石鏃の主体となる無茎鏃を中心に各遺跡で非部分磨製石鏃との対比検討を行う。

1 長さ・幅・厚さなどの法量的分析(図7)

長さ・幅に関しては、非部分磨製石鏃に対して、谷地遺跡・真宮遺跡のように同等の大きさである場合と、山間遺跡・田中下遺跡・牛牧遺跡のように若干小型の傾向が見られる場合とがある。後者の場合、牛牧遺跡例のように、非部分磨製石鏃でより大型のものが存在するために、相対的により小型に集中して見える場合と、山間遺跡例のように長さ2cm以下であることから、絶対的に小型傾向である場合に分けられる(註5)。

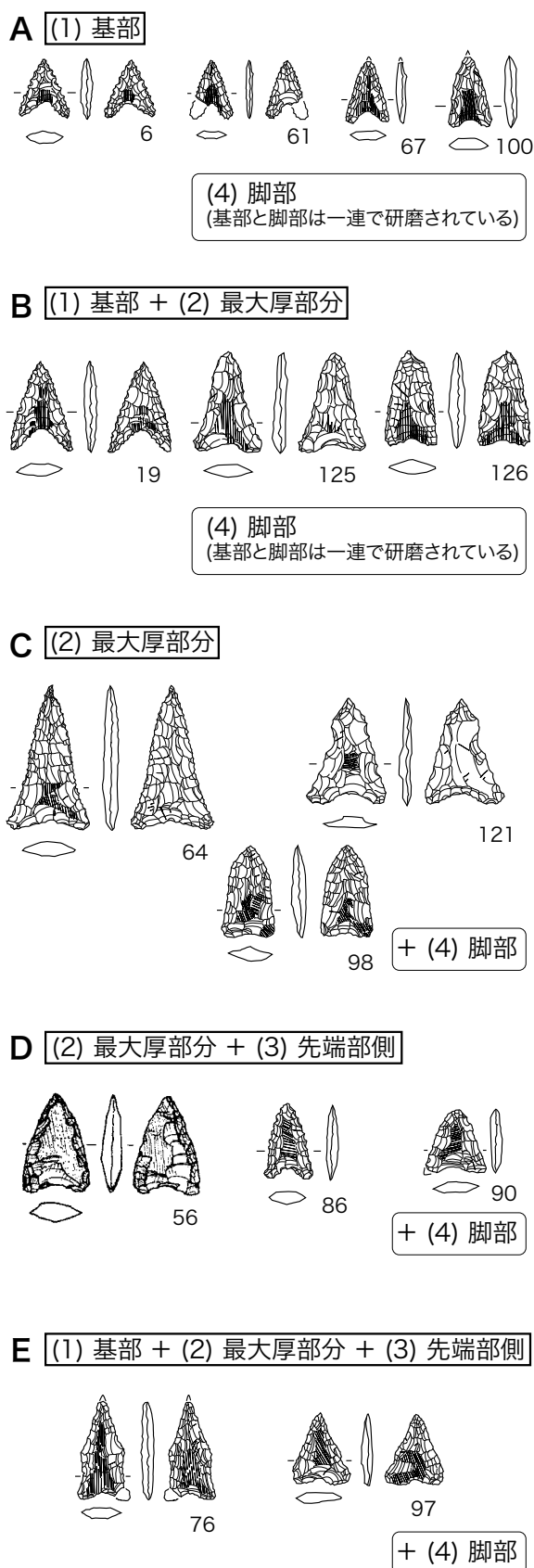


図6 工程Ⅰ類における研磨パターン

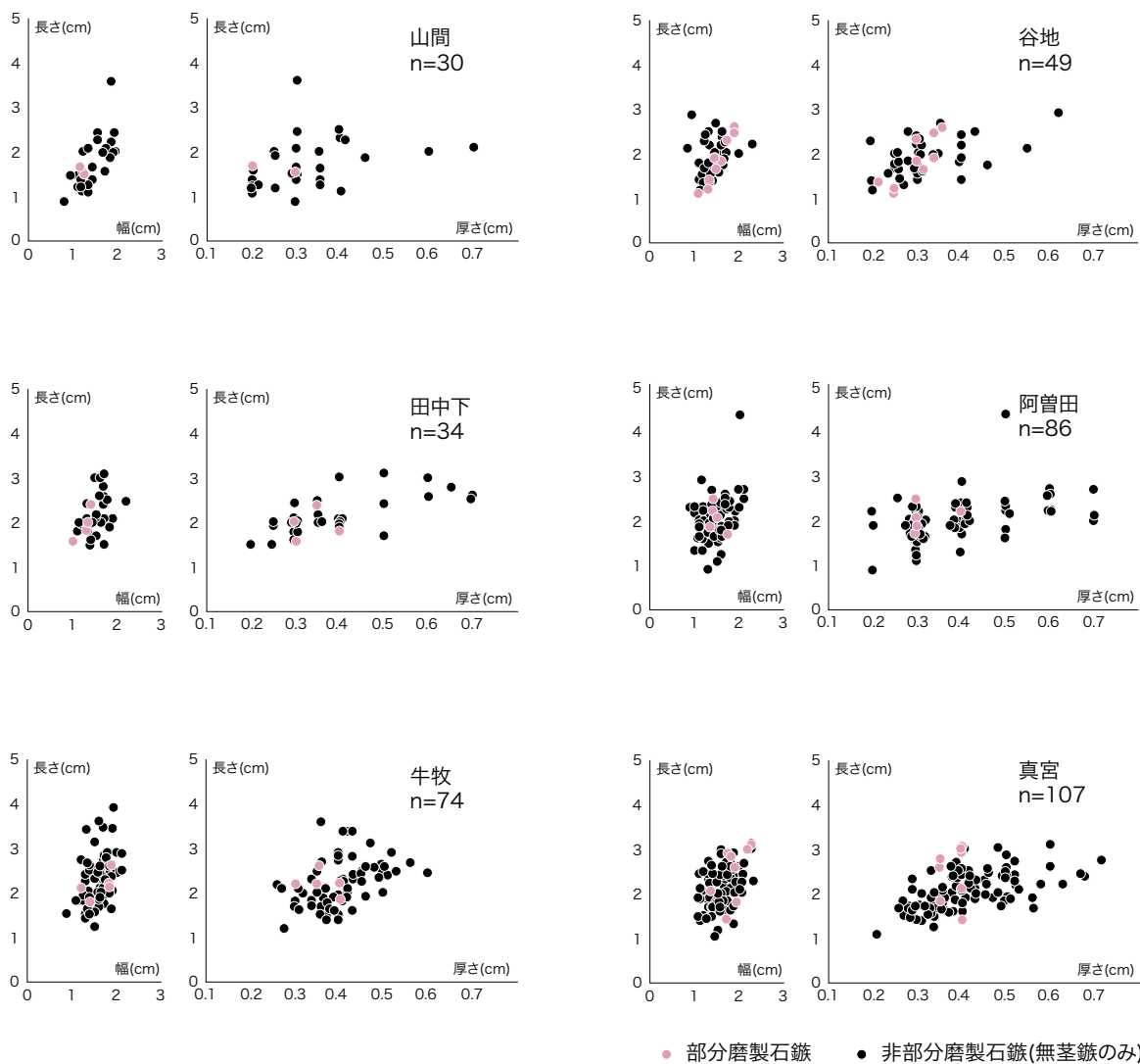


図7 部分磨製石鏃・非部分磨製石鏃の法量比較

2 石材差 (図8) 程度に差はあるものの、非部分磨製石鏃に使用されている石材が、部分磨製石鏃にも使用されている場合が多いといえる。北関東から中部高地では無茎鏃全体でチャート製がある一定量を占めている中で、部分磨製石鏃では黒曜石製が主体であり、部分磨製石鏃と黒曜石との有機的関連性が強いことを示唆している(註6)。一方、東海地域では無茎鏃全体で下呂石主体の状況の中で、部分磨製石鏃もやはり下呂石が主体となっている。東海地域でも愛知県側では剥片石器石材として、サヌカ

イトと思われる石材もある一定量見られるが、部分磨製石鏃としては下呂石が主体のようである。

一方、中川原遺跡(図4の111～113)や川地貝塚(同図130)では、無茎鏃の使用石材に対して、全く別の石材が部分磨製石鏃のみに使用されている。製作前の段階から部分磨製石鏃としての特別な意味が付加されていたことが想定される。

3「瘤状残存部」との関係 縄文時代後期中葉以降、北関東地域以西において有茎鏃・無茎鏃

(註5) 千網谷戸遺跡の事例を同様にグラフ化することはできなかったものの、実見したところ、部分磨製石鏃は、非部分磨製石鏃に対して小型の傾向であり、計測値からも絶対的な小型であると考えられる。

(註6) 註5と同様に千網谷戸遺跡の状況を具体的な数字で提示できないものの、実見の結果、無茎鏃全体でチャート製が黒曜石製よりもかなり多く見られる状況を確認した。

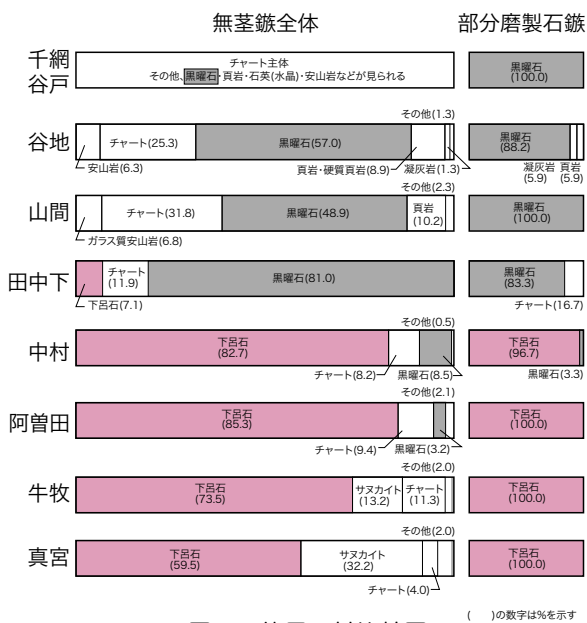


図8 使用石材比較図

に関わりなく、石鏃の中心部に瘤状の残存部が残されている例がしばしば見られるようになる。東海地域において瘤状の残存部が明確に見られるのは、縄文時代晩期以降のようである。恐らく、これまでの石鏃製作のあり方とは異なることが想定され、小型剥片石器製作技術のなかでも一画期となりうる事象として注目できよう。

部分磨製石鏃の中でも東海地域の資料にはこの「瘤状残存部」が見られるものがあり、特に縄文時代晩期以降の下呂石製のものに多見される。上述した、研磨部位で(2)最大厚部分に対して行っているものは、この「瘤状残存部」に研磨を施している場合が多い(図3の64・図4の121など多数)。石鏃の最大厚を薄くする目的で行われた研磨Cは、「瘤状残存部」を薄くする目的であった可能性が高い。一方、黒曜石製を主体とする北関東地域の資料には、部分磨製石鏃に「瘤状残存部」の痕跡が窺えられるものが少ないようである(註7)。

部分磨製石鏃の類型分類

以上の検討から、縄文時代中期末以降の部分磨製石鏃について7つの類型に分類した(図

9・10)。

類型Ⅰ 北関東地域から中部高地にかけての縄文時代中期末から後期前葉の一群である。黒曜石製を主体とする。両面研磨の例が多く、研磨パターンはA・Bを主体とする。法量としては無茎鏃全体のなかで、小型のものが主体である。

類型Ⅱ 北関東地域から中部高地にかけての縄文時代後期中葉から晩期末の一群である。黒曜石製を主体とし、若干凝灰岩製をも含む。研磨は両面研磨が多く、一部片面のみの研磨も見られる。研磨パターンはA・Bを主体とし、凝灰岩製で若干のCを伴う。法量は、遺跡によって差があり、谷地遺跡などでは非部分磨製の無茎鏃とほぼ同様であり、千網谷戸遺跡では小型が主体となる。

類型Ⅲ 黒曜石製を主体としながらも、研磨パターンがCを基本とし、一部Dも見られる一群である。中部高地でも伊那谷近辺の、縄文時代後期後葉から晩期前葉の田中下遺跡例を指標とする。清水天王山遺跡例もこの類型に属すると考えられる。研磨は両面研磨と片面研磨が同様に見られる。法量は非部分磨製の無茎鏃とほぼ同様である。

類型Ⅳ 有茎鏃に部分磨製調整が施されている一群である。ここでは注連引原遺跡例を提示した。これは黒曜石製であるが、非黒曜石製の有茎鏃でも、今後同様の類例が見つかる可能性がある。

類型Ⅴ 東海地域の縄文時代後期を中心に見られるものである。非部分磨製石鏃の使用石材とは別の石材を使用していること、剥離と研磨調整の関係についての、工程Ⅱ類のものが主体であることを大きな特徴とする。特に中川原遺跡例は、素材剥片の段階で研磨を施し、縁辺部のみ剥離調整を行っている。

類型Ⅵ 類型Ⅴと同様に剥離と研磨工程Ⅱ類が主体でありながら、非部分磨製石鏃と使用石材で差が見られないと考えられる点で、類型Ⅴから区別される一群である。溝ノ口遺跡例を提示した。サヌカイト主体の地域で、今後同様の石鏃が見つかる可能性がある。また、八祖遺跡・

(註7) 千網谷戸遺跡の資料の中には、チャート製・黒曜石製の両者に「瘤状残存部」の見られる資料が散見された。しかし、これらの「瘤状残存部」を研磨して薄くすることは行われていない。

大畑遺跡例などチャート製のものに関しても、この類型に属するであろう。

類型VII 東海地域の縄文晩期を主体に見られる一群である。中村遺跡の黒曜石製一例を除き、大部分は下呂石製である。研磨は両面研磨・片面研磨が同等に見られる。研磨パターンはB・C・Dを主体とし、A・Eも若干見られる。「瘤状残存部」を除去することを主目的としていたようである。法量として、非部分磨製石鏃に対

して相対的に小型傾向の例もみられるが、絶対的法量としての、遺跡間の資料差はあまり見られない。一遺跡あたりの点数も他の類型に比べ多いのも特徴である。

齊藤氏は主に類型VIIを中心に取上げられ、部分磨製石鏃への注意を喚起された。また大工原氏は類型I・II・IVについて「関東型局部磨製石鏃」とし、類型VIIについて「中部型局部磨製石鏃」と呼称し、時期的変遷などから「関

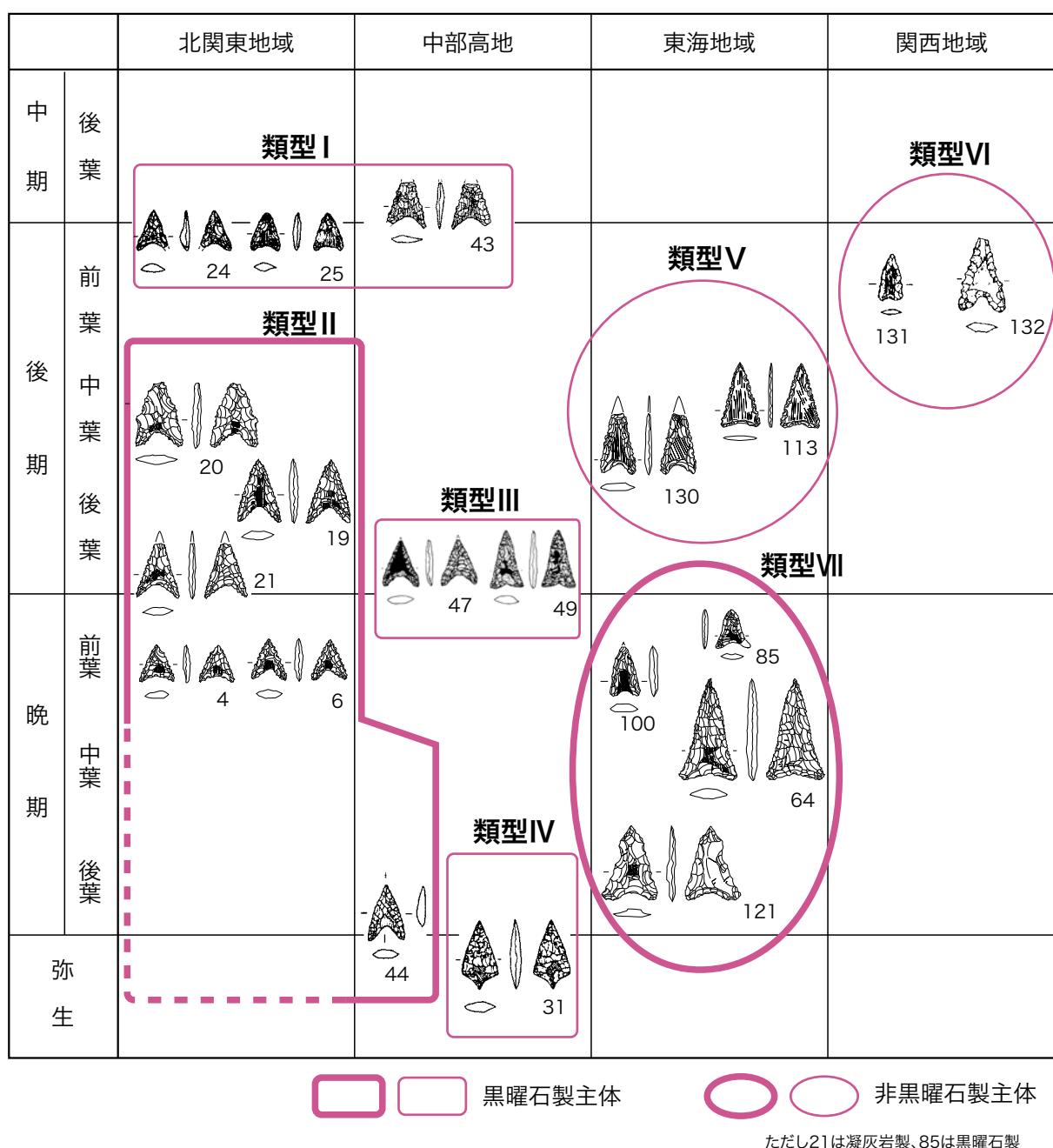
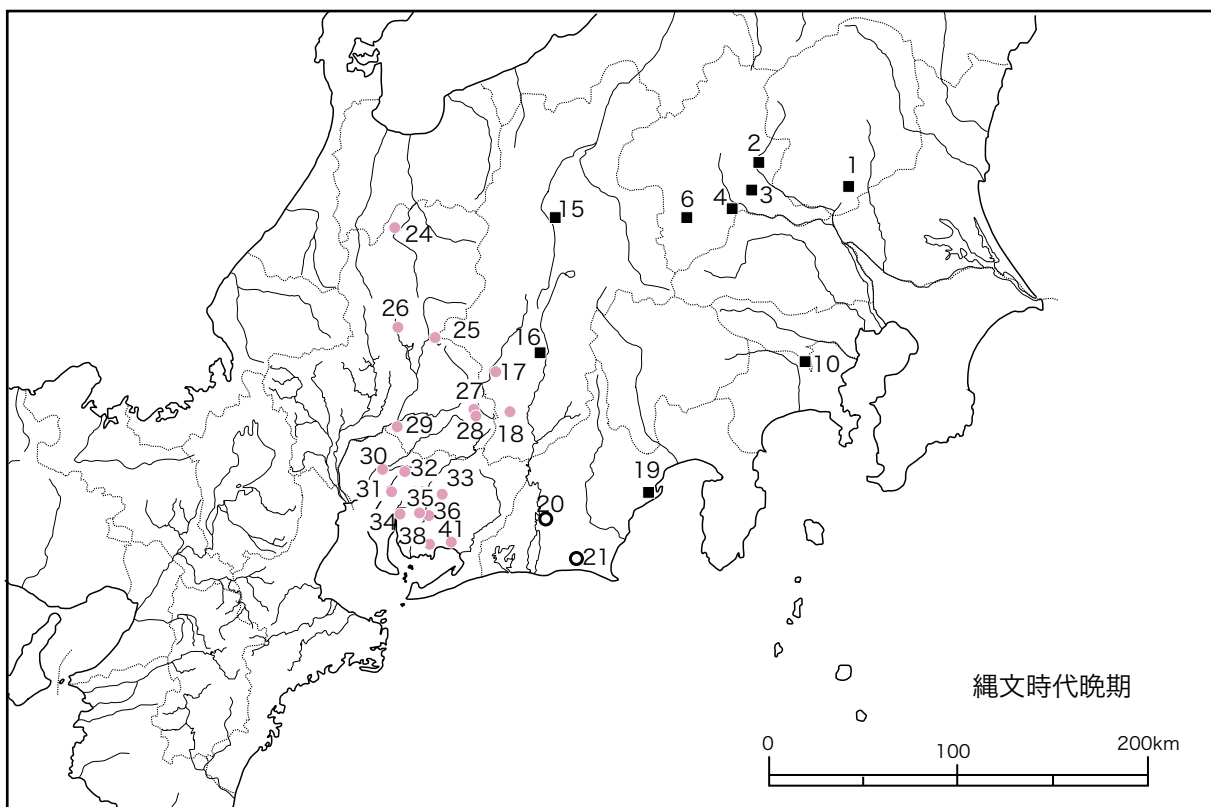
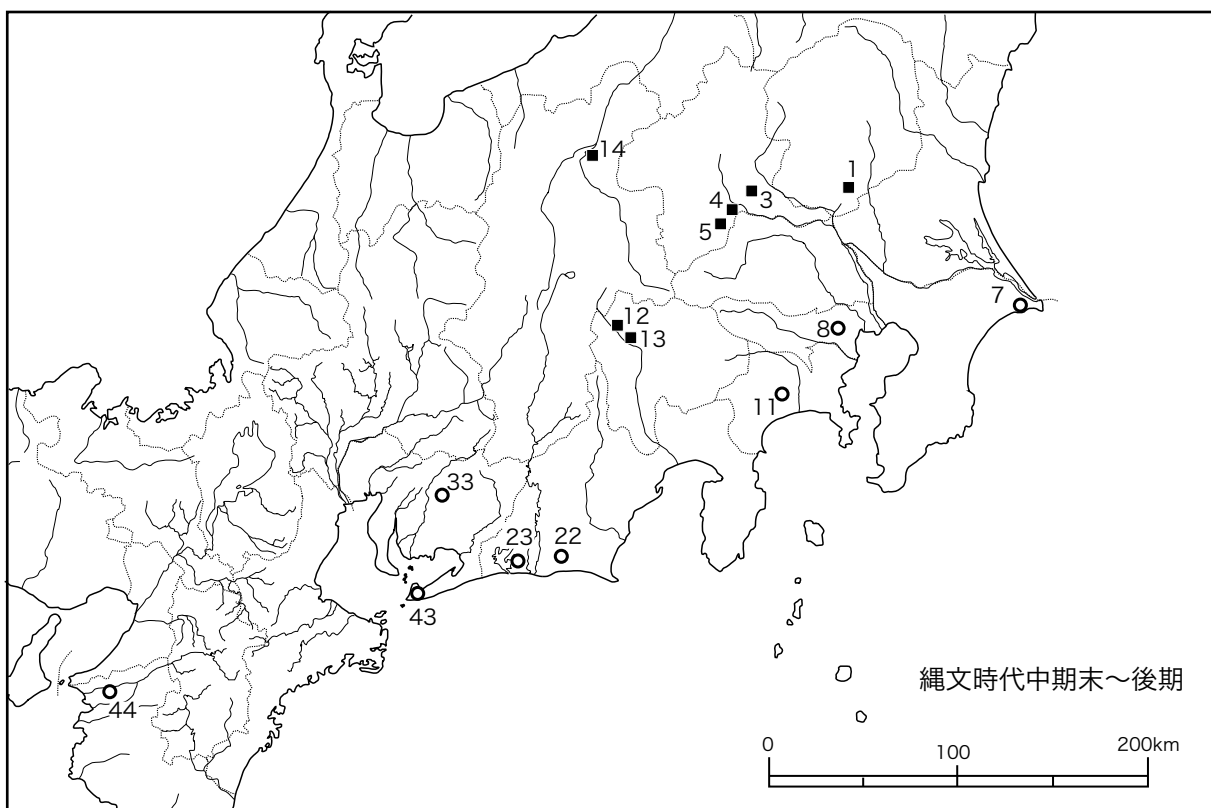


図9 部分磨製石鏃の類型



■ 類型Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ ● 類型Ⅶ ○ 類型Ⅴ・Ⅵ

図 10 類型による部分磨製石鏃の分布

東型局部磨製石鏃」から「中部型局部磨製石鏃」への技術伝播を想定された。しかし、類例Ⅴ・Ⅵの存在はむしろ黒曜石製として一括されていた「関東型局部磨製石鏃」のあり方に再検討を行う必要が生じたといえよう。それは、同じ黒曜石製の部分磨製石鏃でも時期・地域・遺跡の状況により、その資料的位置づけが異なることが想定されるからである。

今回、黒曜石製を主体とする部分磨製石鏃群に対してⅠからⅣの4類型を設定した。類型Ⅰから類型Ⅱへの連続性は否定しないが、類型Ⅰと類型Ⅴ・Ⅵとの関連を探るのも重要と考えられる。また、類型Ⅲの位置づけは、中村遺跡で出土している黒曜石製(図3の85)の検討との関連で重要である。85は研磨パターンはAであり、確かに北関東地域の資料との類似性が窺われるからである。しかし、類型Ⅲ類の研磨面数・研磨パターンは類型Ⅶとの関連性が強い。

筆者が「根挟み」を扱う上で、部分磨製石鏃との有機的関連を想定したのは類型Ⅶの出現であった(川添2004)。今回の分析・検討により時期的関係から類型Ⅱ・Ⅲもその可能性が考えられる。しかし、上述したように類型Ⅱと類型Ⅶとは部分磨製を行う目的が異なることを指摘した。これは「根挟み」という切込み部の幅が限られた部分に、どのような石鏃を装着させようとしたかの差であると想定したい。類型Ⅱは「根挟み」に無茎鏃では主体ではない黒曜石製を使用した結果生じたものであり、一方、類型Ⅶは「根挟み」にも非部分磨製石鏃と同様な「瘤状残存部」が見られる石鏃を使用した結果生じたものではないかと考えられるからである。

まとめと展望

今回、北関東地域から関西地域までの縄文時代中期末からの部分磨製石鏃について取上げた。筆者の力不足のため、最近齊藤氏によって

取上げられた、九州地域の事例について詳細に検討することはできなかった(齊藤2002)。現在、中国・四国地域では管見に及ぶ限り把握しきれなかったものの、今後資料が知られるようになる可能性は高い。

齊藤・大工原両氏によって、東北地域などで出土する、アスファルト付着無茎鏃の付着部位との関連性がすでに指摘されている(齊藤1986・大工原1990)。この想定は卓見である(註8)。しかし、上述したように部分磨製石鏃はいくつかの類型に分かれることから、すべてが一様ではない。この点を踏まえての検討が一方で必要であろう。

東海地域に見られる類型Ⅶの更なる検討に際しては、「瘤状残存部」が見られる小型剥片石器製作技術の実態解明が重要である。また「根挟み」との関連では、類型Ⅶの出現と「根挟み」の出現とは有機的関連はあると想定できるものの、いくつか問題が残されている。伊川津貝塚・保美貝塚などの「根挟み」が大量に知られている渥美貝塚群では、管見に及ぶ限り部分磨製石鏃は確認されていない。石鏃をはじめとする剥片石器製作技術の状況によるのかもしれない。また、鹿角製「根挟み」は突帯文期には見られなくなる一方で、部分磨製石鏃は弥生時代に入ってからともわずかながら残るようである。部分磨製の手法のみが残る背景を探ることは、逆に見られなくなった「根挟み」の意味を考える上で、重要な示唆となりうるであろう。

初めて「部分磨製石鏃」の認識をしたのは、齊藤基生氏のご教示による。川添が整理した牛牧遺跡出土石鏃に部分磨製石鏃の有無を尋ねられたのである。後日、資料と一緒に検討する機会があり、部分磨製石鏃について多くを教えて頂いた。氏のご教示がなければ、この小論はできなかったであろう。また、以下の諸氏および機関には資料見学上の便宜や多くのご教示を賜った。感謝の意を表する次第である。

(註8) 千網谷戸遺跡・谷地遺跡・山間遺跡など北関東地域ではアスファルト類の接着が行われている地域であり、石鏃にアスファルト類の付着がしばしば確認される。しかし、当地ではそれは有茎鏃基部の場合がほとんどであり、部分磨製石鏃を含む無茎鏃の基部には見られない。当地で部分磨製調整が行われるようになった背景には、このようなアスファルト類の使用状況があったものと考えられる。

伊藤晋祐・大下 明・長田友也・角張淳一・
加藤賢二・川合 剛・久保勝正・長谷川豊・馬
場保之・増田 修・中島 誠および愛知県埋蔵
文化財センター諸氏。

愛知県教育委員会・安城市歴史博物館・岡崎

市教育委員会・可児市郷土歴史館・刈谷市郷土
資料館・桐生市教育委員会・(財)瀬戸市埋蔵
文化財センター・天理大学天理参考館・豊田市
教育委員会・浜松市博物館・藤岡市埋蔵文化財
収蔵庫・中津川市教育委員会・明宝歴史博物館

参考文献

- 神村 透,1978「石鏃を見て―群と型式からの私考―」『信濃』30-11. 信濃史学会。
川添和暁,2004「「道具」からみる縄文晩期の生業について―根ばさみを中心に―」『研究紀要』5. 1～14頁。愛知県埋蔵文化財センター。
関西縄文文化研究会,2004『縄文時代の石器Ⅲ ―関西の縄文後期・晩期―』
齊藤基生,1986「縄文時代晩期の部分磨製石鏃について」『古代文化』38-3.128～137頁。財団法人 古代学協会。
齊藤基生,2002「石鏃について」『泉福寺洞穴研究編』271～281頁。泉福寺洞穴研究編刊行会。
信藤祐仁,1989「局部磨製石鏃研究の現状と課題」『山梨考古学論集Ⅱ 山梨考古学協会 10周年記念論文集』67～93頁。山梨県考古学協会。
芹沢長介,1949「半磨製石鏃に就いて」『考古学集刊』1-3.10頁。東京考古学会。
下川達彌,1966「半磨製石鏃に関する一考察」『長崎県高等学校社会科研究集録』
下川達彌,1972「剥片鏃考」『長崎県立美術館館報 昭和46年度』
下川達彌,1973「局部磨製石鏃について―長崎県佐世保市岩下洞穴出土資料をとりあげて―」『長崎県立美術館研究紀要』1.21～35頁。長崎県立美術館。
大工原 豊,1990「縄文時代後・晩期における局部磨製石鏃の展開と意義―縄文時代における石器研究の一試論―」『青山考古』8.39～57頁。青山考古学会。
高橋 哲,1980「千網谷戸遺跡出土の石鏃について」『桐生史苑』19.22～26頁。桐生文化史談会。
田中正太郎,1890「石鏃の先端を磨きたるもの」『東京人類学会雑誌』5-54.32～34頁。東京人類学会。
田中正太郎,1891「石鏃の刃部を磨きたるもの」『東京人類学会雑誌』7-67.381～383頁。東京人類学会。
吉田 格,1951「局部磨製石鏃考」『考古学ノート』創刊号。
古朝則富,2000「部分磨製石鏃について」『どっこいし』64.14～16。飛騨考古学会。

32

遺跡一覧表関係文献

- 麻生 優ほか,1961『西貝塚』磐田市教育委員会。
伊藤晋祐・増田 修・高橋 哲,1978『千網谷戸遺跡発掘調査報告書』桐生市教育委員会。
大江 命・紅村 弘,1973『北裏遺跡』可児町北裏遺跡発掘調査団。
太田守夫・関根 聡ほか,1982『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』松本市教育委員会。
大参義一ほか,1989『刈谷市史 第五巻 資料 自然・考古』刈谷市。
岡崎文喜・新津 健,1978『八祖遺跡』八祖遺跡調査団。
岡安雅彦編,1996『御用地遺跡』安城市教育委員会。
加藤安信編,1993『東光寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
川合 剛,2004『名古屋市博物館資料図版目録5 愛知の縄文遺跡』名古屋市博物館。
川添和暁編,2001『牛牧遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
河口貞徳,1965「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』2- 3.73～109頁。東京考古学会。
柳原功一,1986『豆生田第3遺跡』大泉村教育委員会。
金子貞二,1993『明宝村史 通史編』明宝村教育委員会。
清野謙次,1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。
紅村 弘,1963『東海の先史遺跡 総括編』名古屋鉄道。
熊添古墳調査会編,1985『干隈熊添古墳』
小島 功,2000『宮ノ前遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』宮川村教育委員会。
斎藤嘉彦,2001『真宮遺跡』岡崎市教育委員会。
佐野 元,2001「東海地方西部縄文晩期縁帯文土器様式の様相 瀬戸市大六遺跡出土晩期前葉遺物を中心として」『研究紀要』9. 1～82頁。財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
志村有司,1984『向方南』杉並区教育委員会。
新谷和孝,1988『大明神遺跡』大桑村教育委員会。
杉原荘介・外山和夫,1964「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡―稲荷山遺跡・五貫森遺跡・大蚊里遺跡・水神平遺跡の調査―」『考古学集刊』2-3.37～101頁。東京考古学会。
鈴木保彦・大上周三ほか,1977『下北原遺跡』神奈川県教育委員会。

住田誠行ほか,1979『中村遺跡』中津川市教育委員会。
 大工原 豊ほか,1987『注連引原遺跡』安中市教育委員会。
 高井良夫ほか,1985『下島遺跡』下呂町教育委員会。
 友野良一編,1994『田中下遺跡』宮田村遺跡調査会。
 内藤芳篤ほか,1967『深堀遺跡』長崎大学医学部解剖学教室。
 中尾憲市・前田敬彦,1984『溝ノ口遺跡Ⅰ』海南市教育委員会。
 中尾憲市・前田敬彦,1987『溝ノ口遺跡Ⅱ』海南市教育委員会。
 中村文哉編,1992『平井稲荷山』小坂井町教育委員会。
 長野県教育委員会,1971『長野県中央道埋蔵文化財包含地発掘調査報告書—下伊那阿智地区—昭和45年度』
 成田勝範・小淵忠秋・重久淳一,1984『なすな原遺跡—No.1地区調査』なすな原遺跡調査会。
 二宮忠司編,1983『四箇周辺遺跡調査報告書(5)』福岡市教育委員会。
 長谷川豊,1992『清水市天王山遺跡採集の局部磨製石鏃』『静岡県考古学研究』24. 1～3. 頁。静岡県考古学会。
 春野町教育委員会,1979『春野の石器時代』。
 福岡市教育委員会,1981a『福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告書—I—』
 福岡市教育委員会,1981b『有田遺跡群』
 福岡市教育委員会,1983『比恵遺跡—第6次調査・遺物編—』
 袋井市教育委員会,1981『袋井市大畑遺跡—1950・1977・1978・1980年度の発掘調査—』
 前原 豊・古郡正志・大工原豊ほか,1982『小野地区遺跡群発掘調査報告書』藤岡市教育委員会。
 松井孝宗・高橋健太郎,1999『中川原遺跡』豊田市教育委員会。
 三沢正善・福田定信ほか,1982『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会。
 宮沢公雄,1986『清水端遺跡』明野町教育委員会。
 矢口忠良・青木和明・鶴田典昭ほか,1988『宮崎遺跡—長原地区団体営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査報告書—』長野市教育委員会。
 山口譲治編,1981『板付 板付会館建設に伴う発掘調査報告書』福岡市教育委員会。
 渡辺 誠編,1985『阿曾田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会。



部分磨製石鏃写真(100,105 牛牧遺跡、130 川地貝塚、縮尺は任意)